

「ヨハネの福音書」

さて、個人的にきょうという日をととても楽しみにしていました。というのも、今回から新しいシリーズとして、「ヨハネの福音書」を一緒に学んでいきたいと思えます。ひとりの神学者はかつてこんなことばを残していました。「ヨハネの福音書は、何世紀にもわたって神の民の心を祝福してきました。この福音書は『神からこの世へのラブレター』と呼ばれています。」と。先に勘違いのないように言っておきますけれども、きょうのタイトルを見て、ヨハネの福音書を一度ですべて見るのか？と思った人がいたとすれば、そんな恐ろしいことを私はしません。これから皆さんと一緒に、おそらく2年ぐらい時間をかけながら、偉大な神様から与えられたこのラブレターを、すべての人に関わる大切なみことばの真理を考えていきたいと思えます。

その記念すべき一回目となるきょう私たちがしたいことは、旅の準備です。今ではあまり目にするともないかも知れませんが、ちょっと思い返していただいで、小学生や中学生の頃、遠足や旅行には“旅のしおり”というものがありませんでした。その旅のしおりには、必要な持ち物や一日のスケジュールや行き先なども含めて、旅の大きな内容が書かれていますので、それがあれば迷わずに行動することができました。それと同じように、私たちもまずはきょう、このヨハネの福音書を見ていくにあたって、実際の内容に入る前に、この福音書というものがそもそもどのようなものなのか、三つの質問を中心に大きな概要を見ていきたいと思えます。まず一つ目に、ヨハネの福音書を記したのはいったいだれだったのか。二つ目に、ヨハネの福音書が記されたのはいつだったのか。そして三つ目に、ヨハネの福音書が記されたのはなぜだったのか。これら三つの質問を中心に大きな内容を考えてみましょう。

おそらく「ヨハネの福音書」と聞くと、多くの人にとって、もうすでになじみのある箇所の一つかと思えます。これまでも何度も読んだり、いろんなところで学んだりもして、たくさんを知り知っていてもいいかもしれません。でも、今回私たちがこのヨハネの福音書を学ぶことを通して、何よりの願いは、私たちひとりひとりが、イエス・キリストを個人的に知る者としてさらに成長していくことです。きのうよりもきょう、きょうよりもあす、救い主として来てくださった神の御子、この神の御子がいかにすばらしいお方なのか、このお方がいかに私たちにとって値しないすばらしいお方であり、この方がいかに私たちにとって値しない救いのみわざを成し遂げてくださったのか、そのことをさらに考えてみましょう。そしてそのことを考えれば考えるほど、私たちの願いは、私たちがこの方をますます愛する者として変えられていくことです。これから私たちは学んでいきますが、ぜひ変えられたいということをいつも心に留めながら、祈りながら一緒にみことばを見てみましょう。

○ヨハネの福音書：三つの質問

1. ヨハネの福音書を記したのはいったいだれか？

まず一つ目の質問は、ヨハネの福音書を記したのはいったいだれだったのか？です。その答えは、何のひねりもなく“ヨハネ”でした。もちろん誤解のないように言いますが、ヨハネはヨハネでも、パプテスマのヨハネのことではありません。この福音書を書き記したのは、ゼベダイの子、ヤコブを兄弟に持ち、かつて漁師をしていたその時にイエス様によって召された、あのヨハネでした。十二弟子のひとりでもあって、いやもっと言うと、十二弟子の中でもペテロとヤコブと並んで最もイエス様に近い存在だったヨハネ。そんな彼が、実際に自分が体験したことを書に記しました。約3年もの間、自分自身が時間をともにし、目の当たりにし続けたそのイエス様のすばらしさを、彼はそのままことばに綴ったのです。「ヨハネの福音書」は、まさにイエス様を心から愛した人物による、個人的なあかしでした。だからこそ、この書全体を私たちが読んでいく時に、私たちはそこに絶えず主に対するヨハネの親しみ

を見て取ることができます。私たちがヨハネの福音書を読んでいくその時に、そこに私たちは、著者の主に対する愛情があふれているのを目の当たりにするのです。

▶「イエスが愛された弟子」

でも同時に不思議なことがあります。それは、それほどまでに深い親しみや愛情をもってこの福音書を記したヨハネですが、ヨハネはその中で、自分の名前を出すことは一度としてありませんでした。その代わりに、彼は自分のことを表すのにある表現を用いていました。何だったか覚えています？彼は自分のことを「イエスが愛された弟子」と表していました。例えば、最後の晩餐の場面を思い出していただいて、最後の晩餐の席の様子がヨハネの13：23に書いています。「弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。」最後の晩餐の席の場面だけではありません。十字架につけられている場面に目を移してみると、ヨハネ19：26「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。」十字架につけられている場面から、今度は復活し墓が空っぽになっている場面に目を移してみると、ヨハネ20：2「それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」また復活した墓が空っぽの場面だけではありません。復活した後、弟子たちに現れた場面を見てもこのように書かれています。ヨハネ21：7「そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとって、湖に飛び込んだ。」と。

ここでちょっと立ち止まってみてください。ヨハネは別にほかの表現を用いて自分のことを表すことだってできたでしょう？そう思いませんか？でも彼は自分自身のことを「イエスの愛された弟子」と何度も言い表していました。これを聞いたある人はこう思うかもしれません。ちょっと自分で「自分を愛された弟子」などと言うのは、何か偉そうではないだろうか？と。どうなのでしょう？果たしてヨハネは、どこかおごり高ぶっていたのでしょうか？ほかの人と比べて、自分は特別だと誇っていたのでしょうか？そうではありませんでした。彼は何も自分で自分を誇っていたからそんな表現をしていたわけではありません。そうではなく、彼はイエス様の愛にただ圧倒されていました。彼はイエス様の大きな愛を前にして、ただ圧倒され、へりくだっていました。

よく考えてみてください。主と3年もの間、時間をともにし、また主が天に上ってからこの福音書が記されるまで、実に約50年もの間、主とともに歩み続けたヨハネ。そのヨハネがある日ペンをとってこの福音書を記したのです。この時、年を経ているヨハネは、イエス様が世界を造った偉大な創造主であることも、すべての主権者であり王であることも、また罪人を贖うために地上に来てくださった救い主であることも、だれよりも深く個人的に知る者となっていたでしょう。長い間主とともに歩み続けていたのです。それを知っていた彼がペンをとってそのイエス様の愛を改めて覚えたその時、いや何よりも、そのイエス様の愛を自分自身が受けているのだと覚えたその時、彼のうちにはただ驚きと感謝しかなかったのです。

皆さんに覚えていてほしいのは、このヨハネと呼ばれる人物は、イエス様の愛を受けるのに自分が当然値するとは決して思っていなかったということです。皆さんはどうか分かりません。どうです？「ヨハネという人物を思い浮かべてください。」と言われると、皆さんの頭にはどんな人物像が浮かぶでしょう。すばらしい人物を思い浮かべている人がいるかもしれません。でも、ヨハネという人物は若い時、愛するのが非常に困難なさまざまな弱さや問題を抱えていた人物でもありました。覚えています？ヨハネには、かつてイエス様から直接つけられたあだ名がありました。どんなあだ名でした？マルコ3：17にこのように書いています。「ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、このふたりには**ボアネルゲ**、すなわち、**雷の子**という名をつけられた。」では「雷の子」と聞いて、どんな人を思い浮かべるでしょう？どんな時も穏やかで、心の優しい人でしょうか？いや、多分皆さんの中には、その間逆のものが浮

かんでいるでしょう。おそらく感情的で荒々しかったり、短気で怒りやすかったり。まさにそのとおりでした。ヨハネはまさにそのあだ名のとおり的人物だったのです。私たちは十二弟子を思い浮かべるとき、多くの場合すぐにペテロを思い浮かべて、彼こそ一番の問題児というふうに扱うかもしれません。でもペテロの影に隠れていただけで、ヨハネも数々の問題を引き起こしていた存在でもありました。例えば彼の感情的で短気な部分は、エルサレムに旅をしていた道中にも表れていました。イエス様と弟子たちがサマリアにやって来たその時の様子がルカの9章にこのように記されています。ルカ9：51-53を見てみるとこう書いています。「:51 さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、:52 ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリア人の町に入り、イエスのために準備した。:53 しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリア人はイエスを受け入れなかった。」想像できますか？サマリアの町の人々がイエス様のことを受け入れませんでした。イエス様がだれなのかということと全く理解していなかった彼らは、主を喜んで歓迎するのではなく、その主を拒んでいたのです。そこで、そんな人々の態度を目の当たりにしてヨハネがとった行動は何だったのか？その次の節にはっきりと描かれていました。54節「弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」」すごいことが言われていました。ヨハネは激しく怒っていたのです。自分たちの主人であるイエス様を受け入れなかったその人々に対して、大胆にも彼らは、「自分たちがさばきを与えましょうか。自分たちが火を下して焼き滅ぼしましょうか。」と主に提案していました。ここで気づきます？ヨハネはただ短気だっただけではありません。ヨハネは、イエス様の代わりに自分がさばき主の役割を担うことができるのだと、高慢にもなっていました。またそれに加えて、彼のうちにはあわれみの心もなかったのです。彼はそんな弱さを覚えているような人々に対して、あわれみの心を示そうともしませんでした。高慢で、あわれみの心のない人物。でもこれだけではありません。ヨハネは同時に、非常に自分勝手に利己的な人物でもありました。覚えているでしょうか？ある時、イエス様と弟子たちの間でこんなやりとりがなされたことがありました。マルコ9：33-35にこうあります「:33 カペナウムに着いた。イエスは、家に入った後、弟子たちに質問された。「道で何を論じていたのですか。」:34 彼らは黙っていた。道々、だれが一番偉いかと論じていたからである。:35 イエスはおすわりになり、十二弟子を呼んで、言われた。「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなの子になり、みなに仕える者となちなさい。」すべてのことをご存じだったイエス様は、弟子たちの間に生じていた問題にも当然気づいていました。当の弟子たちは自分たちの会話がばれていないと思っていたでしょう。弟子たちは自分たちの会話がばれていないと思っていたので、イエス様から「道で何を論じていたのですか。」と問われた時、黙っていました。沈黙の中で彼らはどんなに恥ずかしい思いをしていたことでしょうか。ばれていないと思っていたことが、ばれていたのです。やってはならぬと思っていたことがばれたのです。本来であれば率先して仕える者でなくてはならないにもかかわらず、だれが一番偉いのかということと言い争っていた弟子たち。そんな彼らに対して、イエス様は、へりくだるといふことの重要性、必要性を改めてここで教えていました。ここで十二弟子は全員、確かに大切なレッスンを学んでいたのです。でも残念なことに、それは長続きはしませんでした。

またしても、ある者たちがへりくだって仕えることを忘れて高慢になっていたのです。いったいだれだったか？そのうちのひとりがヨハネでした。今私たちは9章を見ていますが、その次の章マルコ10：35-37にこう書いています。「:35 さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思ひます。」:36 イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」:37 彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」」案の定、この話を聞いたほかの10人の弟子たちの様子が続く41節に書いていました。「:41 十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。」どうです皆さ

ん、ここまで見てくればもう明らかでしょう。かつてのヨハネはさまざまな弱さや問題を抱えていた人物でした。感情的で怒りやすく、人々に対するあわれみの心に欠け、何度教えられたとしても学ぶのに遅く、仕えることよりも仕えられることを望むような、そんな自己中心的な存在でした。高慢な存在だったのです。でもそんなヨハネが、イエス様の愛を知りました。そんなヨハネが、イエス様の愛を知って変えられました。皆さん、だからこそです。この福音書をヨハネが記していたとき、彼のうちには自分自身の名前を一度でも出して、自分自身に焦点を当てようなんて、そんな思いは全くありませんでした。彼は自分の弱さや愚かさも、足りなさもかたくなさも罪深さも、よくわかっていました。それと同時に、そんな自分にさえ及んだイエス様のその愛の大きさに、ただただ圧倒されていたのです。あまりにも信じられないほどの値しないその愛を自分が受けたということに感謝していた彼は、自分の名前を出すようなそんなおこがましいことは絶対にできず、ただ自分自身はイエスが愛してくださった弟子なのだ、そう口にしたわけです。値しないその愛をただイエスが示してくださったその弟子なのだ。ヨハネは主の愛の前にへりくだっていました。

そしてすごいのは、かつての愛に乏しかったそのヨハネは、晩年“愛の使徒”として人々の間で知られるようになりました。その愛の使徒であるヨハネの最後のことばについて、聖書学者のひとりヒエロニムスという人物がこんな物語を残しています。皆さんよく聞いてください。このようにヨハネは最後のことばを残していました。「死に瀕した時、弟子たちは何か最後のことばを残してほしいと求めました。ヨハネは「子たちよ。互いに愛し合いなさい。」と言いました。何度もそのことばを繰り返しました。そんな彼に弟子たちは「言い残したことはもうないか。」と尋ねました。すると彼はこう答えました。「それで十分だ。それが主の命令なのだから。」と。以前は人々にあわれみの心をいっさい示そうとしなかったヨハネ。愛するのが難かったヨハネ。その人物は、イエス様の愛によって変えられました。

さて、ここでちょっと自分のこととして考えてみてください。今の私たち自身はどうでしょう？果たして私たちは、イエス様の愛を本当に知っているのでしょうか？果たして私たちは今もなお変わらず、イエス様の愛のすばらしさに圧倒され続けているのでしょうか？改めて考えてみてください。私たちの主は、確かにすべてをご覧になっておられるお方です。私たちの考えも、私たちのふるまいもすべてをご存じのお方です。救われる前の過去の愚かな私たちのその姿も、救われた後も変わらず多くの葛藤を抱えるような私たちのそんな姿も、主はそのすべてをご存じのお方です。そしてこんな方の前に立つ時に、本来ならば私たちはだれひとりとして主の愛になど値しないでしょう。でも、それでもなお主はご自分の者を変わずに愛してくださるお方なのです。どうでしょう？そのイエス様の変わらない愛というものを、自分のこととして知っているのでしょうか？イエス様が示してくださったその愛、その愛のすばらしさに私たちは日々驚きと感謝をもって歩んでいるのでしょうか？そのすばらしさにいつも賛美をささげているのでしょうか？皆さん、もしこのヨハネを圧倒したあまりにもすばらしすぎるその主の愛を知りたいと望むのであれば、皆さん、その愛を知る方法があります。かたくなな者さえ変えることもできたその主の愛の力というものを知りたいと望むのであれば、皆さん、私たちはその愛を知る方法があります。何だと思いませんか？それが、この「ヨハネの福音書」だということです。著者は“ヨハネ”でした。イエス様と時間をともにして、イエス様の愛を個人的に知って、イエス様の愛のすばらしさに圧倒され、イエス様の愛によって変えられた人物。その人物が、いかにイエス様の愛がすばらしいのかということはこの書を通して私たちに語り続けてくれているのです。その姿を私たちに教え続けてくれているのです。だとすれば思いませんか？いったいどんな愛をヨハネは教えてくれているのだろうか？私たちがいつも圧倒されるようなその主の愛はどんなものなのだろうか？私たちを変えることのできるその主の愛はいったいどんなものなのだろうか？……と。それを知りたいと願うのであれば、それをこれから私たち

と一緒に学んでいきます。だから楽しみにしててください。一つ目の質問の答え、著者は“ヨハネ”でした。

2. ヨハネの福音書が記されたのはいつか？

次に二つ目の質問、ヨハネの福音書が記されたのはいつだったのか、です。その答えは、紀元後80年代半ばから90年代ごろでした。つまり、私たちが見ているこの「ヨハネの福音書」というのは、イエスが地上を去ってから約50年後に記された書であり、新約聖書の中では最後から三番目。ヨハネの黙示録、ヨハネの三つの手紙の次に書かれたものでした。ヨハネの福音書は後ろから数えた方が早い、そんな書物だったのです。これを聞いて別に何も思わないかもしれませんが。紀元後80年代半ばから90年代に記されたものだと言われても、それがどうかしたのかと考える人もいるかもしれません。でもここで皆さんに一つ覚えてほしい大切なことがあります。それは、晩年ヨハネがこの福音書を記したその時、彼を除く11人の使徒たちはもうすでに亡くなっていたということです。同じようにイエス様と時間をともに過ごし、同じようにイエス様と食事をし、同じようにイエス様と会話を楽しみ、同じようにイエス様とともに学び、同じようにイエス様とともにさまざまな困難をくぐったそんな友人たちはみな、すでにこの時、死んでいたということです。しかも彼らはみな普通の死を経験したのではありませんでした。イエス様を裏切って自殺したイスカリオテのユダを除いたすべての使徒たちは、信仰のゆえに殉教していったのです。そのことを教会の歴史は教えてくれています。では具体的にはどのように殉教していったのでしょうか？アンデレは自分を苦しめた人々に向かって「主に立ち返るように」と語り続ける中、十字架につけられ殺されました。トマスは宣教旅行中、やりで刺されて殺されました。バルトロマイはむちで何度も何度も打たれ、その結果、皮膚が剥がれその後、十字架につけられ殺されました。ピリポはむち打たれ投獄されたその後、十字架につけられ殺されました。マタイは槍で突き刺され殺されました。アルパヨの子ヤコブは説教していたその時、神殿から突き落とされ、棒で殴られた後石打にされて殺されました。タダイはむち打たれ十字架につけられ殺されました。ペテロは十字架に逆さまにつけられ殺されました。シモンは十字架につけられ、その後ノコギリでからだを切断されて殺されました。かつて時間をともにしたその友たちはそのようにして亡くなっていたのです。でも皆さん、友だけではありません。彼の実の兄弟であったヤコブも、ヘロデ王の命令によって剣によって殺されていました。その様子がみことばの中にもはっきりと描かれています。使徒12：1-2にこのように書いています。「:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」

さて、ヨハネの立場に立って少し考えてみてください。繰り返しになりますが、ヨハネがこの福音書を記した時、イエスが地上を去ってから約50年以上が経過していました。そしてその長い期間の中で、彼は何度も何度も親しい友人や家族が殺されていくという知らせを耳にし続けたのです。信仰のゆえに、かつて愛したその友の上に降りかかった残虐な死がいつ自分自身の上に降りかかってきたとしてもおかしくないと、そう恐れを抱いてもおかしくはなかったでしょう。また、もちろん彼自身の歩み自体も決して楽なものだったわけではありません。確かにほかの使徒たちとは違ってヨハネは唯一殉教することは最後までありませんでした。でも同時に、その長い生涯を通して彼はほかの使徒たち以上に多くの敵の憎しみや迫害を受け、痛みや苦しみにさいなまれ、何より愛する友や家族を失うという孤独や悲しみをも味わっていたのです。皆さん、もし仮に私たちが彼と同じ状況に置かれたとしたら、私たちはそんな状況にどのように応答するのでしょうか？いつ迫り来るかわからない危険に、恐れや不安をただ覚えているだけでしょうか？かつて親密に時間を過ごした、そんな愛する者たちが悲惨な死を迎えたと聞き、ただ絶望を覚えるだけでしょうか？かつての友たちは信仰のゆえに激しい苦しみを経験し続けていました。私たちなら、自分自身の持っているその信仰のゆえに苦しみがあつことを前にして喜びや熱意を失い、忠実に歩むことを妥協してしまわないのでしょうか？

長い間、ヨハネはさまざまな痛みを味わいました。長い間、ヨハネは悲しみを覚えました。長い間、ヨハネは孤独さも覚えました。でも、そんなヨハネがとった行動は、絶望に打ちひしがれることではなかったのです。ヨハネはイエス様に従順に従っていくその時に、大きな苦難が伴うことを知らなかったわけではありません。イエス様を信じるその信仰には、確かに大きな犠牲が伴うのだということを理解していなかったわけではありません。むしろその犠牲の大きさというものをほかのだれよりもよくわかっていました。でも、それでもなおヨハネは最後の最後まで愛する主に忠実に従うことを選んだのです。ヨハネは、イエス様を知っていました。ヨハネは、たとえ大きな苦しみや痛みが待ち受けたとしても、すべてを犠牲にすることになったとしても、でも、イエス様を手にするのを最後まで選び続けました。イエス様を知ってそのイエス様に信頼すること、それにまさるものはいっさいない、と確信していたのです。果たして私たちは同じ確信を今持っているでしょうか？皆さん、もしある日、私たちがすべてのものを犠牲にしなくてはならない選択を迫られたとしたら、それでもイエスとともに歩むことを私たちは選ぶでしょうか？イエス様のすばらしさを知っていること、それだけが決して譲ることのできないものであるからこそ、私たちは苦しみをも喜んで受けようとは思いませんか？それほどまでにヨハネを突き動かしたそのイエス様のすばらしさを、果たして私たちは今、知っているでしょうか？

皆さん、もしヨハネを支えた同じ主のそのすばらしさを知りたいと望むのであれば、それを知る方法があります。どんなものにもまさってすばらしいその偉大な主を私たちがもっと知りたいと望むのであれば、それを知る方法は、私たちにあります。何だと思えます？それがこの「ヨハネの福音書」だということです。イエス様と時間をともにし、そのイエス様のすばらしさを個人的に知った人物が、ほかのどんなものにもまさるイエス様のすばらしさを知っていたその人物が、私たちにに対してこの書を通して教え続けてくれているのです。何を置くことになったとしてもイエス様を手に行っていること、それだけが私たちにあってすばらしいと。では、そのイエス様のすばらしさとはどんなものなのだろう、と思いませんか？そう思うのであれば、皆さん、私たちはこれからそのことを学んでいきます。ですから、それを楽しみにしておいてください。

3. ヨハネの福音書が記されたのはなぜか？

そして最後三つ目の質問は、ヨハネの福音書が記されたのはなぜだったのか、です。その答えをヨハネ自身が私たちに教えてくれていました。ヨハネ 20 : 30 - 31 を見ていただくとこう書いています。「:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るためである。」いったいどうしてヨハネはこの福音書を記していたのでしょうか？この福音書はいったい何の目的で記されたのでしょうか？その答えは、「イエス様が神の子キリストであることを信じるため、また信じてその御名によつていのちを得るため」でした。それが目的でした。そしてそのことばのとおり、ヨハネはこの福音書全体を通して、イエス様がまさにまことの神様であって、人として来られた救世主、キリストであるということを、何度も何度も明らかにしていました。来週詳しく見たいと思いますけれども、この書の一番初め、ヨハネ 1 : 1 は、このようなことばで始まっていました。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」ヨハネは一番初めから、イエス・キリストがまことの神様であることを、はっきりと示していました。「ことばは神であった。」と。でもそれと同時に、この後を見ればわかりますが、そのことばが人となって私たちの間に住まわれたお方でもある、ということをヨハネは教えていました。(ヨハネ 1 : 14) イエス様が確かにまことの神様であること、人として来られたそんな救世主キリストであることを、ヨハネは繰り返し繰り返し教え続けていたのです。

▶「わたしは…である」

ほかにもいろんなことを挙げるができます。これに加えて、例えばイエス様がご自身を「わたし

は…である」と表現しておられる場面が福音書に7度も登場していました。具体的にどんなものがあったか？イエス様は言われていました。「わたしはいのちのパンである」（ヨハネ6：35）「わたしは世の光である」（ヨハネ8：12）「わたしは羊の門である」（ヨハネ10：7）「わたしは良い牧者である」（ヨハネ10：11）「わたしはよみがえりであり、いのちである」（ヨハネ11：25）

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」（ヨハネ14：6）「わたしはまことのぶどうの木である」（ヨハネ15：1）こうしてイエス様は、ご自身がほかのものと比べることのできない唯一まことの存在であること、ただひとり、まことの神様であられるということを繰り返し公に明らかにされ続けていたのです。ですから、こんな目的で記されたヨハネの福音書を私たちが学んでいけば学んでいくほど、私たちは確かにイエス様が神の子キリストであるのだということを目の当たりにするようになっていきます。学べば学ぶほど私たちは神の子イエス・キリストがどれほど偉大なお方なのかということを感じ知らされることになっていきます。

でもここで覚えていて欲しいのは、そのようにしてヨハネが「イエス様が神の子キリストである」と福音書を通して繰り返し語っていたのは、何も人々に単なる知識として蓄えさせるためではなかったということです。というのも、先に読みましたが、この福音書が記された目的は何と言われていました？この福音書が記された目的は、「イエスが神の子キリストであることをあなた方が信じるため、またあなた方が信じてイエスの御名によっていのちを得るため」でした。言い換えれば、私たちがただ知識として蓄えるためではなく、イエス様が神の御子キリストであると自分のこととして信じるためでした。果たして私たちは今自分のこととして、イエス様が神の御子キリストであると、本当に信じているでしょうか？この方と個人的に交わって、いつもこの方とともに歩むことのできる喜びを経験しているでしょうか？まさに殉教していった人たちがそうであったように、最高のイエス様、このすばらしいイエス様のためであればすべてのものを喜んで犠牲にしたい、神の子キリストのためであれば、私はすべてのものを横に置いてでも主に従っていきたくないと、そんな思いを持って私たちは歩んでいるでしょうか？この方を信じることによって与えられる永遠のいのちに感謝をしながら日々歩んでいるでしょうか？

皆さん、改めて考えてみてください。ヨハネはイエス様とともに時間を過ごしました。イエス様のあふれんばかりの愛とすばらしさを個人的に知りました。またヨハネは、イエス様がまことの神様であり、まことの人であり、確かに神の子キリストであるということも知りました。そして何より、そのイエス・キリストのうちに罪からの救いが、永遠のいのちがあるのだということを彼は知ったのです。だからこそです、皆さん。だからこそヨハネは、そんな愛に富んだ救い主のすばらしさというものに圧倒されていました。そして、ただそんなイエス様の姿をこの福音書を通して人々にも明らかにしようとしたのです。神の子キリストがいかにすばらしいのか、そして神の子イエス・キリストを心から信じる者には永遠のいのちが与えられるのだと。思いませんか？私たちが今から見ようとしているこの福音書は、ただの知識を蓄えるための書物ではありません。そうではありません。すべての人にとって必要な救いを、イエス・キリストにあるその希望と永遠のいのちを私たちがあわれみのうちに見出すことができるものです。ただの書物ではありません。私たちはこのみことばのうちに、私たちにとって最も必要なその救いのすばらしさを見出すことができるものです。そしてそんなすばらしいものが私たちの目の前にあるのだとするならば、もっとこの書を知りたい、この書に記されていることをもっと自分のこととして知りたいと、そんなふうに思わないでしょうか？

もし、まだイエス・キリストを自分の救い主として、本当に個人的なこととして知らない方がおられるのであれば、どうかこのヨハネの福音書の教えに真剣に耳を傾け続けてください。あなたにとって何よりも必要な救い、それがこの中にあります。あなたにとって何よりも必要な福音のメッセージ、それがこの中にあります。どうか、そのイエス・キリストのすばらしさを自分のこととして知って、そしてこの学びの機会を通してこの方を信じ受け入れてください。そのことを心から祈っています。

またもうすでにイエス・キリストを自分の救い主として知っておられると言われる皆さん。どうでしょう？あなたのイエス様の愛に対する驚きと感謝は、日々増し加わっているでしょうか？神の御子イエス・キリストとともに歩むことができるというその喜びは、増し加わっているでしょうか？皆さん、私たちは普段の歩みの中において、いろんな誘惑に直面します。いろんな罪につまずくことがあります。でも、覚えています？先週私たちは何を学びました？私たちはいつでも恵みによって主に立ち返ることができる、ということを知りました。私たちは罪を犯しても、私たちの良い行いに立ち返るではありません。私たちは悔い改めて、主のすばらしさに立ち返り続けることができるということを知りました。鍵は、私たちの愛する主のすばらしさを知り続けることです。その驚きで心を満たし続けることです。その主の愛に圧倒された感謝と喜びで心を満たし続けることです。そしてそのためには皆さん、私たちはこの方を自分のこととして知り続けなくてはなりません。

来週からこのヨハネの福音書を始めていくわけですが、皆さん、何よりも願うのは、2年経って振り返った時に、「私はイエス様のことをより知ることができた。そして、今私はイエス様のことを心から愛している。」と確信を持つことです。ぜひその目標とともに目指して、キリストのすばらしさを知っていきましょう。主の栄光を現すために、主を知ることについてこれからともに学んでいきましょう。